

悩む力

書店に行くと、人の悩みを扱った本は山ほどありますが、そのような中、在日政治学者の姜尚中氏が書いた「悩む力」は100万部を超える大ベストセラーとなっています。その後出版された「続悩む力」も売れ行き好調だそうです。

「悩む力」がそのようにヒットした理由は良くは分かりませんが、お金、家族、仕事、健康とそれこそ数え上げればきりが無い程私たちの周りには悩みの種が溢れており、日々、悩みを抱え、悩みから解放されたいと願っている人が如何に多いかという事を示しているのだと思います。

一体、悩みとは何なのでしょう。

姜氏は、「悩む力」の冒頭、母が涙声で歌っていた「青い夜空は星の海よ一、人の心は悩みの海よ一」という「アリラン」の歌詞の一節を引用しています。

「人の心は悩みの海」だとすると、人は生きている限り、悩みからは解放されず、悩みの海に漂うしかないのかも知れません。

今、現に大きな悩みを抱えている人は、行き先の見えない、ただ漆黒の闇が広がる海に泳ぎ、苦しい日々を送っているのではないのでしょうか。

姜氏の母親は、在日朝鮮人として酷薄な人生を生きただったようです。姜氏によると「母親は悩みの海に沈淪しながらも、生きる意味を問い続ける営みを捨てる事はなかった。」そうですが、彼は、「母が極限状態を生き抜いたのは悩みの海を抱えていたからで、それが生きる意味への意思がよりなえる事がなかったのだと思う」と述べています。

姜氏は、本書を通して、誰にでも具わっている「悩む力」こそ、生きる意味への意思が宿っているという事を、文豪夏目漱石と社会学者マックス・ウェーバーを手掛かりに私たちに示そうとしています。

人々の悩みは、人によって様々ですが、姜氏は「悩みや苦悩を集合的に見るならば、そこには時代や社会の環境が大きな影を落としているはず」としています。個人個人で見れば、仕事や健康状態、家族の状況等によって、抱える悩みはそれぞれですが、もう少し大きな目で見れば、経済的不況や雇用環境の変化、少子高齢化や核家族化といった様々な状況が、人々の悩みに色濃く投影さ

れていることは間違いありません。

姜氏は、今の時代の特徴を「グローバルゼーション」と「自由の拡大」と捉えています。

即ち、今や世界がグローバル化する中で、政治や経済、文化等あらゆるものが国境を越えて行き交い、人は誰でもインターネット等を通じて様々な情報にアクセスし、幅広くいろんな人とネットワークで繋がり、自由に議論に参加したりできるようになっています。

こうした状況について姜氏は、「一見すると、自由がいたるところにころがっている」ように見えるが、しかし、「自由の拡大といわれながら、それに見合うだけの幸福感を味わっているだろうか。満ち足りた気分や安心感を味わっているだろうか」と疑問を呈しています。そして、「存外、いつも余裕なく急ぎ立てられて、人と人との関係もパサパサな殺伐とした味気ないものになりつつあるのではないか」と述べていますが、我々の悩みの根源は、こういうところにあるのかも知れません。

人は、生きる事に真面目であるべきだと思います。姜氏は、真面目であるという事は「全てが表面的に浮動するような現代社会に楔を打ちこむような潔さがある」といっていますが、私も同感です。

人は死ぬまで「悩む事」から解放されないのだとすれば、悩みにもまじめに向き合わなくてはならないという事でしょうか。

姜氏は、「まじめに悩み、まじめに他者と向かい合う。そこに何らかの突破口があるのではないのでしょうか。とにかく自我の悩みの底を「まじめ」に掘って、掘って、掘り進んで行けば、その先にある、他者と出会える場所までたどり着けると思う。」と述べています。

「悩む事」が、生きている証だとすれば、悩むことを恐れず、じたばたせず、とことん悩んでみるというのも大事な事なのだと、改めて感じたところです。

(塾頭 吉田 洋一)